

活字メディアに見る文末の指定辞の変遷

—なぜデアル体は衰退したのか—

森本 奈那

1.はじめに

明治20年に起こった言文一致運動で、指定辞（断定の助動詞）の選択については特に問題になった。日本語には様々な指定辞があるが、私的な表現はともかく、文章語として公的な表現にふさわしいものが欠乏していた。二葉亭四迷がダ体、山田美妙がデス体、嵯峨乃屋御室のデアリマス体など様々な試みがなされる中で、尾崎紅葉が『多情多恨』（明治29年）等に採用したデアル体が、文章における指定辞の主流になっていく。理由としては恐らく、鳥村抱月¹が示唆するように他の指定辞と比べ、比較的公的性格を有するものであったからであろう。

デアル体は、小説にとどまらず新聞、雑誌、教科書等幅広い媒体で採用され、口語体文章のスタンダードの地位を獲得した。だが、近年ではデアル体の勢力が衰え、代わりにダ体が一般的に用いられるようになった。

本稿では、活字メディアである新聞・雑誌・小説・教科書の文末表現がデアル体からダ体へ移行した実態を記述すると共に、その背景について考察する。

2. 先行研究

新聞の文末の指定辞がデアル体からダ体へ移行したことについては、大野早苗²の「社説の文体—デアル体からダ体へ—」（2010）の考察がある。

大野は、新聞の社説に使われている文末表現のダ体とデアル体について調査している。この中で、デアル体からダ体へ移行した訳を以下のように述べている。

社説文のデアル体からダ体への文体の変化について、紙面の分かりやすさを追求する中で文体が変化してきたということが示唆される。このうち分かりやすさの追求というのは、各新聞が文字のサイズを大きくし文字数を減らしてきたという動きとも連動するものである。分かりやすく親しみやすい文章を目指した結果、かつて話し言葉的な響きがないものとして選ばれたデアル体から、話し言葉をその出自に持つダ体を選ばれたようになったということは大変興味深い。（中略）

ダ体そのものが言文一致運動以来の時を経て、文章語として一定の格を確立してきたということでもあるだろう。（中略）社説はそれぞれの社としての見解を広く社会に知らしめる場であり、そこで用いられる文章にも重厚さや権威的なものが求められ、文体に関して保守的であると思われる。

新聞の文末表現がデアル体からダ体へ移行したのは、スペースの制約や記事の読みやすさを重視したことによるようである。

3. 活字メディアの文末表現の変遷

小説界では、明治20年に言文一致運動が起こった。この運動以降、地の文を口語で書くという動きが高まっていく。この風潮がだんだん広まっていき、小説以外にも新聞・雑誌・教科書の文章も口語体で書かれるようになっていく。

3-a. 新聞の文末表現の変化

新聞は小説界から遅れを取り記事に口語が使われるようになったのは明治38年からであった。筆者の調査によると、昭和21年までの新聞記事は、文語体で書かれた表現が散見された。これより、新聞の言文一致化は大幅に遅れていたことが言える。

次に、明治期から現代までの新聞におけるダ体とデアル体の変遷を見る。資料は明治38年からほぼ10年おきに、読賣新聞の1日分の1面記事から用例採集を行ったものである。

表1

| 新聞に使われているダ体とデアル体 | | | | | | | | |
|------------------|------|----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|
| | | 明治38年 1月12日 | 大正9年 1月12日 | 大正15年 12月1日 | 昭和9年 1月12日 | 昭和10年 12月1日 | 昭和21年 12月1日 | 昭和31年 12月1日 |
| 文中 | ダ体 | 6 | 6 | 1 | 6 | 1 | 5 | 3 |
| | デアル体 | 11 | 9 | 9 | 5 | 7 | 18 | 5 |
| 文末 | ダ体 | 4 | 1 | 1 | 4 | 0 | 3 | 2 |
| | デアル体 | 2 | 9 | 11 | 14 | 12 | 31 | 9 |

| | | 昭和39年 1月12日 | 昭和42年 12月1日 | 昭和51年 12月1日 | 昭和61年 12月1日 | 平成8年 12月1日 | 平成18年 12月1日 | 平成28年 12月1日 |
|----|------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|
| 文中 | ダ体 | 2 | 9 | 1 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| | デアル体 | 7 | 1 | 9 | 2 | 1 | 2 | 2 |
| 文末 | ダ体 | 1 | 6 | 18 | 6 | 7 | 13 | 9 |
| | デアル体 | 8 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |

表1に関して。文末表現を見ると、明治38年ではデアル体よりもダ体の方が多く使われている。必ずしも文末表現はデアル体がスタンダードな形とは言えない。

■明治38年1月12日（木）第5面より

《文中》

- ・防禦線に配するものにも不足を來した程だと云ふ話です
- ・斯の如くであるから海陸共旅順に居る兵氣ハ…
- ・僅かに五個聯隊だと云ふ話だ
- ・一般に知れ渡つて居る例の會社であるから日本の彈丸が…

《文末》

- ・日本の驅逐艦二隻を撃沈したと信じて居る様だ、
- ・艦長がお前達に向かつて命令を下す命令である
- ・全く居らなかつたと云ふ説もある位である

大正9年から昭和39年まではデアル体の方が優勢である。その後、昭和42年の文末ではダがデアルを上回り、昭和61年から現在までは、全てダが用いられデアルは使用されなくなった。

この他、文中の表現（中止法）について、昭和51年の時点でデアル体の使用例が9例ある。以降は中止法自体の用例が少なく明確なことは言えない。

3-b. 雑誌の文末表現の変化

次に、雑誌における指定辞の調査結果を見る。『太陽』・『文藝春秋』・『中央公論』の3誌を資料として用いた。このうち、『太陽』に関しては「太陽コーパス」に拠った。他、『文藝春秋』（以降、『文春』とする）と『中央公論』（以降、『中公』とする）については、各年の3月号から用例を採集した。

表2

| | | 雑誌に使われているダ体とデアル体① | | | | | |
|----|------|-------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 『太陽』 | | | | 『文春』 | |
| | | 1895年 | 1901年 | 1917年 | 1925年 | 1965年 | 2016年 |
| 文中 | ダ体 | 0 | 7 | 1 | 2 | 3 | 8 |
| | デアル体 | 18 | 11 | 39 | 37 | 11 | 3 |
| 文末 | ダ体 | 0 | 5 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| | デアル体 | 3 | 22 | 45 | 42 | 15 | 0 |

表3

| | | 雑誌に使われているダ体とデアル体② | | | | |
|----|------|-------------------|-------|-------|-------|-------|
| | | 『中公』 | | | | |
| | | 1905年 | 1920年 | 1929年 | 1965年 | 2016年 |
| 文中 | ダ体 | 0 | 0 | 1 | 11 | 1 |
| | デアル体 | 11 | 63 | 37 | 48 | 8 |
| 文末 | ダ体 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | デアル体 | 2 | 24 | 50 | 63 | 27 |

3誌について総じて言えるのは、近年においても新聞に比べデアルが優勢であることである。特に『中公』は2016年に至っても文末でダ1例デアル27例であり、デアルが圧倒している。

『太陽』

《デアル体》

- ・我日本國に於ける學術の進歩の事である、(井上哲次郎「戦争後の學術」1895年)
- ・一向映えぬ役まわりである。(万代花生「鉄道駅夫」1901年)
- ・世界政策を行はんとして居ることは屢々聞く所である。(小林丑三郎「米国の鉄輸出制限に対する方策」1917年)
- ・吾々人類の夢想だにもしなかつたことである。(長岡外史「最近に於ける飛行機の発達」1925年)

《ダ体》

(用例なし。)(1895年)

- ・ヤードメンなどに散々小言を喰はされる事があるさうだ。(万代花生「鉄道駅夫」1901年)

(用例なし。)(1917年)

(用例なし。)(1925年)

『文春』

《デアル体》

- ・現国連アメリカ大使のスピブソンが生れた年である。(ジョン・ガンサー「二〇世紀の内幕」1965年)

(用例なし。)(2016年)

《ダ体》

- ・この男もまたプリンストン大学で学んだ。(ジョン・ガンサー「二〇世紀の内幕」1965年)
- ・「日本企業は技術移転に消極的だ」(柯 隆「中国経済まだまだ悪くなる」2016年)

『中公』

《デアル体》

- ・義侠に富みたる處が、武士道である、(南條文雄「武士道と佛教との關係に就いて」1905年)
- ・私の認めて、一缺點なりとする所である。(堀江歸一「社會改造の見地より觀たる新所得税法批判」1920年)
- ・マンチェスター學派の自由放任論を保持する人々である。(土方成美「現代世相の展望」1929年)
- ・またそうなるべきだということである。(富永健一「社會開發のための基礎理論」1965年)
- ・これほどの多数を与党単独で占めるのは、通常困難である。(大西 裕「歴代大統領における「理念」と「実利」」2016年)

《ダ体》

(用例なし。)(1905年)

(用例なし。)(1920年)

(用例なし。)(1929年)

- ・官庁が「発展」と考えているものにも努力があり計画もあるわけだ。(富永健一「社会開発のための基礎理論」1965年)
- ・実際、もう理念は結構だ、(大西裕「歴代大統領における「理念」と「実利」」2016年)

3-c. 小説の文末表現の変化

次に、小説の地の文に使われているダ体とデアル体を調査した。

まず、デアル体の代表作、夏目漱石の『吾輩は猫である』(明治38-39)を若干観察する。

《デアル体》

- ・吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。
- ・是が彼の毎夜繰り返す日課である。

《ダ体》

- ・人間は利己^{ちゑ}智慧^{かへ}は却つて猫より劣つて居る様だ。
- ・職業は教師ださうだ。

デアル体は事実として把握した事の説明であるのに対して、ダ体は「～様だ」「～だそうだ」のように、推量や伝聞を表現する主観的な表現であるという違いがある。

次に、小説の地の文で文末に使われている指定辞の変遷を観察する。調査した文献は以下の通りである。

表 4

| 明治20年～平成28年までの小説(地の文)に使われているダ体とデアル体 | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|-----------|----|----|------|----|
| | | | ダ体 | | デアル体 | |
| 年代 | タイトル | 調査範囲 | 文中 | 文末 | 文中 | 文末 |
| 明治20年 | 浮雲(第一～三篇) | 各篇冒頭15頁ずつ | 4 | 7 | 3 | 3 |
| 明治38年 | 吾輩は猫である | P5-P15 | 53 | 28 | 29 | 59 |
| 大正9年 | 真珠夫人 | P3-P18 | 11 | 7 | 10 | 23 |
| 昭和9年 | 蟹工船 | P258-P273 | 23 | 5 | 0 | 0 |
| 昭和39年 | 氷点(上) | P8-P18 | 11 | 38 | 9 | 42 |
| 平成28年 | 東京すみっこごはん | P11-P28 | 27 | 26 | 0 | 0 |

『浮雲』は、ダ体の作品として知られており、文末のダ体がデアル体を上回るのは当然と言える。

総じて、小説も新聞や雑誌と同様なデアル体からダ体への移行が見られると言えるが、新聞や雑誌の文章と異なるのは、作品によってばらつきがあるところである。

昭和9年の『蟹工船』は、文末にデアル体が1つも見られない。一方、昭和39年の『氷点（上）』の文末では、デアル体がダ体を上回っている。これは、書き手の癖によってこのような違いが出て来るのではないかと考えられる。この点について具体的に例文を観察する。

以下は、『蟹工船』の281から291頁までの間で地の文に登場した文末にダ体が使われている箇所をいくつか抜き出したものである。

- ・すぐ頭の上で、警笛が鳴り出した。皆は立止ったまゝ、空を仰いだ。
- ・――その情景は、漁夫達の胸を、眼のあたり見ていられない凄さで、えぐり刻んだ。
- ・船は後に長く、曠野の一本道のような跡をのこして、つき進んだ。

例文より、『蟹工船』に登場するダ体の文章は、作中で起こっている出来事を読者に淡々と伝える印象を受ける。従って、文末をダ体にすることで、登場人物に対する語り手（著者）の感情は一切含まれていないと言える。

次に、『氷点（上）』の138から155頁までの間で地の文に登場したデアル体が使われている箇所をいくつか抜き出した。

- ・涙を腕でグイと拭ったその時である。
- ・万一、陽子の出生を知ったならば、夏枝は決して陽子を家には置かないはずである。
- ・啓造に、何か詰問するはずである。

『氷点（上）』に使われているデアル体の文は、最初の文が分裂文（「その時涙を腕でグイと拭った」の分裂文）であり、あとの二つが「はずだ」という形式名詞文である。いずれも語り手の説明的態度が現れている点『蟹工船』と異なる叙述になっている。小説の場合、作者の書き癖や物語の内容によって、文末表現にデアル体とダ体の選択が行われているようである。

3-d. 教科書の文末に使われているダ体とデアル体

次に、『国定読本』における指定辞を観察する。

調査資料には「日本語歴史コーパス」を使用し、全六期ある中で「第一期」（一年と三年から使用）、「第二期」（六年から使用）、「第三期」と「第六期」（一・三・六年から使用）をそれぞれ三学年に分けて調査した。

表5

| 国定読本に用いられているダ体とデアル体 | | | | | | | | | | | | |
|---------------------|----|----|----|------|----|----|----|----|----|------|----|----|
| | 文中 | | | | | | 文末 | | | | | |
| | ダ体 | | | デアル体 | | | ダ体 | | | デアル体 | | |
| | 一年 | 三年 | 六年 | 一年 | 三年 | 六年 | 一年 | 三年 | 六年 | 一年 | 三年 | 六年 |
| 一期 | 1 | 2 | — | 0 | 0 | — | 0 | 4 | — | 0 | 4 | — |
| 二期 | — | — | 1 | — | — | 2 | — | — | 0 | — | — | 11 |
| 三期 | 0 | 9 | 9 | 0 | 0 | 8 | 3 | 10 | 10 | 0 | 0 | 19 |
| 六期 | 7 | 15 | 6 | 0 | 0 | 13 | 6 | 7 | 5 | 0 | 0 | 13 |

一年生の国定読本には、第一期（1904年）・第三期（1918年）・第六期（1947年）どれも文末・文中共にデアル体が使用されていなかった。三年生では、第一期のみ文末表現にデアル体が使用されていたが、第三期・第六期は文中にも文末にもデアル体は使用されていなかった。対して、六年生の教科書では、全てにおいてデアル体の文末表現が主流であることが窺える。これより、教科書の場合は学年が上がるにつれて、デアル体が用いられる文章が増加することが分かる。

《デアル体》

- ・じょうきといっても、もとは、水である。（三年生 第一期）
- ・話をしてみるのは小太郎と三郎とである。（三年生 第一期）
- ・分業法に依つて製造するからである。（六年生 第二期）
- ・十分心得てゐる事である。（六年生 第三期）
- ・なつかしい天地である。（六年生 第六期）

《ダ体》

- ・なるほどよいかんがえだ。（一年生 第三期）
- ・これはいいおこさんだ。（一年生 第六期）
- ・羽があるから、鳥のなかまだ。（三年生 第一期）
- ・みんなにげてしまつたさうだ。（三年生 第三期）
- ・日本の子どもらは、星だ。（三年生 第六期）
- ・むだをなくすことだ。（六年生 第三期）
- ・あの音は、おもちゃ屋さんだ。（六年生 第六期）

児童の発達段階に応じて、口語的なダから文章語的なデアルへと進んでいることがうかがえる。戦後唯一の国定読本である第六期においても、六年生の指定辞はデアル体が優勢である。

4. 分析

新聞・雑誌・小説・教科書で用いられているダ体とデアル体の変遷を辿ってきた。

この中で、デアル体からダ体への移行が似たような形で見られる新聞・雑誌・小説の3つに絞り、指定辞の変遷を分析しまとめる。

- ①新聞：戦前は、デアル体の方が優勢だった。終戦後、昭和40年以降はダ体の使用がデアル体を上回り、昭和60年からは、ダ体のみとなる。
- ②雑誌：終戦後はダ体の使用も増加するが、新聞と比較すると依然として文末にデアル体が使用されている。
- ③小説：必ずしも現代に近づくにつれてデアル体からダ体へ移行するという訳ではない。作品内容や作者の書き癖によってはダ体とデアル体の使用数にばらつきが見られる。

4-a. 「ダ体」と「デアル体」の語史

『日本国語大辞典³』によると、ダ体は「古例は抄物などの東国系資料に多く見られ、室町期に関東で成立したと考えられる」とある。元は東国語であったが、江戸で普通に用いられるようになり、のちに教科書に採用され、標準語となった。一方で、デアル体は諸説あるが、漢籍国字解で使用され、明治期以降は演説言葉として使用されていたとあった。従って、デアル体は学問的性格や公的言語としての性格が認められた表現だと言える。

また、吉田金彦⁴（1971年）はデアル体について、「弁論や論文など自己主張を強く出す場面で用い、威圧的な響きを感じる為会話には向かない」と述べている。公的な場面で一段高い所から聞き手に自身の論を主張するような語感があると示唆したものであろう。

4-b. 新聞の歴史と指定辞の変遷

文末のデアル体からダ体への移行がはっきりとたどれるのは新聞である。

新聞の文末指定辞がデアル体からダ体へ移行した理由については、新聞の報道姿勢の変遷が関係しているのではないかと私は考える。

まずは、戦前の新聞の報道姿勢に関して、金戸⁵（1995年）は「我が国新聞文章の変遷過程」で次のように述べている。

新聞が啓発的な役割を果たしていたのは幕末からであった。しかし、当時の民度は極めて低く、文章を解するものは特別の階級に属したといつてよいくらいだった。これは、新聞記者を志すものについても言える事である。当初の新聞記者は洋學系統に属する人と、漢學系に属する人たちが多かつた。これが、明治初期になると、戯作系統の記者が 雑報報道の面を擔當し、それが大衆の好みに投じていった。明治十五年ごろに登場した「今日新聞」が、記事に記述的な文體と口語の使用を取り入れたことが、後に新聞の文體の革新にまで発展させた。例えば、明治八年に創刊された「平假名繪入新聞」という小新聞は、記事にルビ付平假名交りの口語文を用いたし、「讀賣新聞」⁴も創刊当初は口語體を使用した小新聞であった。

ただ、当時の読者層からはむしろ士人向きの深い舊來の文章が喜ばれたというところにこれが單なる試みに終つた原因があると思われる。

新聞の文章は基本的に士人向きの文章であつたようである。この様な報道姿勢は、後の第二次大戦中まで続いていたのではないかと思われる。

「新聞文章の戦前と戦後⁶⁾」(1955年)でも、「新聞は公器であると言われるように、大衆を指導するものであつた。それが戦後になってことながら考え方の曲折を表現するための工夫が見られるようになり、漢語調に対する国文調の流れが生かされてきた」と述べられている。尚、新聞の言文一致が遅れた理由については「文語調には格調があるのに、口語調にはそれに対抗する力がない。特に政治記事は権威をもたせる必要がある為、戯作のリズムでは権威のリズムに対抗できないことが、日本文化にとって一番の問題であろう」と指摘している。

前坂⁷⁾(1995年)の「日本のジャーナリズムの発展」では、戦前の新聞の報道姿勢について次のように述べている。

新聞は、権力批判の機能を果たしていたこともあり、特に大正デモクラシー時代は内閣を退陣に追い込むこともあつたが、1918年(大正7年)に起こつた「大阪朝日新聞」への弾圧事件「日虹事件」が起こつた後、新聞は政治のやり方に関する批判精神が低下していった。

この日虹事件以降の報道は、権力の広報的側面を強めていったと言える。特に軍国主義時代の新聞について、同じく前坂(1995年)は次のように述べている。

1930年代に入ると、世界恐慌や国内政治混乱、社会不安、中国大陸での紛争等の重なりにより、ファシズムが台頭したことで新聞にかかる政治的圧力も強まった。これにより、満州事変や5.15事件、後の15年戦争が起こつた際に新聞の報道は世の中の危険意識を煽り、軍部の暴走を容認し積極的に支持する姿勢になっていった。1936年(昭和15年)に起こつた2.26事件から戦時統制時代に入り、新聞も軍や政府から厳しく統制されるようになる。1940年(昭和15年)から『1県1紙』方針が打ち出され、新聞は全国的に統合されていく。これにより、新聞は国の宣伝機関と化し、言論の自由も完全に封殺され、「国营新聞」と化した。

太平洋戦争中の新聞は、30以上の法規による言論統制によって、新聞の報道はがんじがらめにされ、「大本営発表」以外のニュースは一切書けない状態となつた。

しかし、権力に対する批判勢力であつたとしても、権力の広報という色彩をもつとしても、大衆に対して啓蒙的なスタンスで語るという点では同じであつたと思われる。これが変化するのは戦後である。

戦後の新聞の報道姿勢について西尾⁸⁾(1969年)は、「戦後の民主化により全国民に理解される内容であることを強く要請され、その重要性を一層高めた」と主張して

いる。また、「昭和27年に行われた新聞用語懇談会によって、言葉の言い換え・書き換えが記事に反映され、合わせて文章や文体も変化した」事も指摘している。つまり、士人志向の啓蒙的で高踏的な報道姿勢を取っていた新聞は、大衆相手の平明さへ方向転換がなされたのである。これがデアル体からダ体へと移行した理由ではないかと筆者は考える。

一方、雑誌の文章は署名入りのものが多く、中立的な事実の伝達というよりも、書き手が一般に向けて自身の意見を披歴するための文章が多い。論述的な語調をもつデアル体が根強い理由だろう。

また、小説の文章に登場するダ体とデアル体について『蟹工船』と『氷点（上）』を比較した場合、『蟹工船』は作者の感情は一切抜きにした淡々とした口調で実態を語るダ体が多く見られる。対して、『氷点（上）』は作者の説明的態度の現れる文章で、デアル体が多く見られた。小説におけるダ体とデアル体の使い分けに関しては、作者の叙述への態度の違いが現れているようである。

5. まとめ

以上、新聞・雑誌・小説などの活字メディアにおける文末の指定辞を中心に観察してきた。総じて言えることは、現代に近づくにつれてデアル体からダ体への移行が見られる点である。しかし、媒体によってはその在り方は異なっており、特に新聞の文章におけるデアル体からダ体への移行は非常に劇的であり、総合的であった。

この変化の背景には、新聞が啓蒙的である報道姿勢から平明に事実を伝える報道姿勢へと変化したことがあるだろう。そしてその大きな転換期が第二次大戦後の民主化ではないかということが、本稿の結論である。

〈定本資料〉

①新聞

- ・読売新聞 明治20年1月12日 朝刊 1面
- ・読売新聞 明治38年1月12日 朝刊 5面
- ・読売新聞 大正9年1月12日 朝刊 5面
- ・読売新聞 大正15年12月1日 朝刊 2面
- ・読売新聞 昭和9年1月12日 夕刊 1面
- ・読売新聞 昭和10年12月1日 夕刊 2面
- ・読売新聞 昭和21年12月1日 朝刊 1面
- ・読売新聞 昭和31年12月1日 朝刊 1面
- ・読売新聞 昭和39年1月12日 朝刊 1面
- ・読売新聞 昭和42年12月1日 朝刊 1面
- ・読売新聞 昭和51年12月1日 朝刊 2面
- ・読売新聞 昭和61年12月1日 朝刊 1面
- ・読売新聞 平成8年12月1日 朝刊 1面

- ・読売新聞 平成18年12月1日 朝刊 1面
- ・読売新聞 平成28年12月1日 朝刊 1面

②雑誌

『太陽』

- ・井上哲次郎「戦争後の學術」『太陽』(明治28年 1号)
- ・万代花生「鉄道駅夫」『太陽』(明治34年 14号)
- ・小林丑三郎「米國の鐵輸出制限に對する方策」『太陽』(大正6年 12号)
- ・長岡外史「最近に於ける飛行機の發達」『太陽』(大正14年 1号)

『文藝春秋』

- ・ジョン・ガンサー「二〇世紀の内幕」『文藝春秋』(昭和40年 3月号)
- ・柯 隆「中国經濟まだまだ悪くなる」『文藝春秋』(平成28年 3月号)
- 『中央公論』
- ・南條文雄「武士道と佛教との關係に就いて」『中央公論』(明治38年 3月号)
- ・堀江歸一「社會改造の見地より觀たる新所得税法批判」『中央公論』(大正9年 3月号)
- ・土方成美「現代世相の展望」『中央公論』(昭和4年 3月号)
- ・富永健一「社会開發のための基礎理論」『中央公論』(昭和40年 3月号)
- ・大西 裕「歴代大統領における「理念」と「実利」」『中央公論』(平成28年 3月号)

③小説

- ・二葉亭四迷「浮雲」『二葉亭全集 第一卷』博文館(明治43年 5月発行)
- ・夏目漱石「吾輩は猫である」『現代日本文學大系 17 夏目漱石集(一)』筑摩書房(昭和43年 10月発行)
- ・菊池 寛「真珠夫人」『菊池寛全集 第五卷』平凡社(昭和4年 2月発行)
- ・小林多喜二「蟹工船」『小林多喜二全集 第二卷』新日本出版社(昭和57年 6月発行)
- ・三浦綾子「氷点」『三浦綾子全集 第一卷』主婦の友社(平成3年 7月発行)
- ・成田名璃子『東京すみっこごはん 雷親父とオムライス』光文社(平成28年 4月発行)

④国定読本(教科書):日本語歴史コーパスより

「1年生」

- ・第一期 明治37年
- ・第三期 大正7年
- ・第六期 昭和22年

「3年生」

- ・第一期 明治37年

- ・第三期 大正7年
 - ・第六期 昭和22年
- 「6年生」
- ・第二期 明治43年
 - ・第三期 大正7年
 - ・第六期 昭和22年

【参考文献】

1. 島村抱月「言文一致と敬語」『中央公論』15-2（明治32年2月）
2. 大野早苗「社説の文体～デアル体からダ体へ～」表現学会
https://hyogen-gakkai-official.org/pdf/91/91_01-10.pdf（2022年5月6日 確認）
3. 1-a, 「だ」（日本国語大辞典）
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200202898c08CKgr9qsb>（2022年5月6日 確認）
- 1-b, 「である」（日本国語大辞典）
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200202dd7331M1EDXNbL>（2022年5月6日 確認）
4. 吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』明治書院（1971年1月）
5. 金戸嘉七「我が国新聞文章の變遷過程」『新聞学評論 第4巻』（1995年4月）
6. 言語生活編集部「新聞文章の戦前と戦後」『言語生活』筑摩書房（1955年1月）
7. 前坂俊介「日本のジャーナリズムの発展」『現代マスコミ論のポイント』学文社（1995年5月）
8. 西尾寅弥「文章の変遷 新聞」『文章表現ハンドブック』至文堂（1969年2月）

〈もりもと なな／2021年日本語・日本文学科卒〉